

令和7年度 幼児教育研修（資質向上）

「保育の質を高める記録」

～子どもも保育者もワクワクする保育を楽しもう～

日時：令和7年5月16日（金）15：00～17：00

会場：足立区役所 庁舎ホール

講師：和泉短期大学 教授 松山 洋平 氏

## 保育記録には多様な種類がある

「～が、～を、どこでした」  
で終わらない記録にする。

松山洋平  
資質向上研修資料より

### ドキュメンテーション

写真を用いた記録。保育者自身の振り返りのツールである他に、子ども、保育者同士、保護者や地域の人との多様な関係性の中での「対話」のツールにもなる。

### 保育ウェブ

子どもの遊びや活動において、大切にしたいキーワードを中心として、子どもの興味・関心を読み取りながら、子どもの姿を予測してそこから連想される様々な事柄を連続的・発展的に自由に書き加えていくもの。

### 他にも

- ・ラーニングストーリー
- ・ポートフォリオ
- ・エピソード記述
- ・保育マップ型記録 など

保育者が自分事として「私にはこう見えた」という視点が入らないと、記録としての意味がない。

松山先生より

何を記録し共有するのか、記録の方式の特徴を知り、園にあったよりよい在り方を探っていく。

### 記録や計画は…

- ・多様な異なる視点や眼差しとの出会いが対話の場である。
- ・子どもの姿から見える価値や意味の再発見になる。
- ・自ら子どもを見る見方や保育の振り返りにつながる。
- ・文脈に即して自分や自園の課題も見えてくる。

### 学びを生み出すような対話は…

- ・お互いの価値を認め、受け入れる語り合いが対話となる。その中で、新たな気付きや学びの可能性が生まれてくる。
- ・保育者等が保育の記録や経過を互いに見合うことは、より多面的な子どもの理解や保育の評価につながる。
- ・記載方法は、「園としてどのようなことに重点を置いて保育を捉えているか」という評価の方向性について共通理解をつくる。

### 記録や計画を通して対話をする。

記録が変われば対話も変わる。  
記録の内容が変われば対話の内容も変わる。  
記録の視点が変われば対話の視点も変わる。  
対話の視点が変わると計画が変わる。

子ども主体の質の高い教育・保育の保障が求められている

もう一度

「あたりまえ」を「見直したら」  
保育はもっとよくなる

へ向けて取り組む改革期

## 保育の質と評価

保育の質は子どもが得られる経験の豊かさと、それを支える保育の実践や人物・物的環境など、多層的で多様な要素により成り立つ。

### 保育の質を捉えるに当たり、留意すること

「子どもにとってどうか」という視点を基本とする

様々な文脈や関係性を考慮する

一定の水準で保障すべき質と実践の中で意味や可能性を追求していく質の両面がある

### 評価を踏まえた計画の改善

- ・計画と記録を連動させ、見返しやすいようにすること
- ・職員同士が子どもの姿を中心に対話できること
- ・園外に開き、様々な対話をする風土を作ること

# 「評価」の捉え方を変えよう

保育をもっと楽しく 保育所における自己評価ガイドライン ハンドブック  
厚生労働省より

## 評価とは？

日々の保育実践の意味を考え、次のより良い実践へとつなげていくために対話と共に、振り返るもの



それまでの成果を総括的に提示するテストの点数のような評価（トップダウン型）ではなく、その場の文脈や当事者の価値観に基づき実践の可視化、協働的な省察、対話のプロ説を通して実践の判断を継続的に行っていく価値観。評価は暫定的な判断であり、次の課題が見えるためのもの（形成的な評価）

保育者個人でも、同僚間でも、職場全体でも、子どもとも、保護者とも、地域社会とも

振り返るって楽しい、  
振り返るっておもしろい、  
振り返って“味わう”って幸せ

これが園評価であり、園評価の公表  
開かれた対話によって保育の質の向上を目指すもの

松山洋平 資質向上研修資料より

「何を・どのように書くか」  
皆で考え、視点を共有する



共感的な読み手がいることで、  
より伝わる記録になる

各園でオリジナルに取り組みのポイント  
や工夫を考えていくことが重要

## 対話することでの質向上へ

保育の質を高めるためには、心を開いて保育を振り返ることが必要。「省察」し、多様な他者とともに子どもを語り合うこと。

昨年のゼミ研修受講生が、計画や記録（保育WEB）に  
チャレンジした実践報告がありました。



記録と計画がつながりのあるものにすることで自分の保育にも変化が見られ、子どもの姿の捉え方が深まったり、保育者のねがいをどう落としこんでいくのかをより考えることができました。

聞いてくださった方からの質問で新たに気付いたことや、自信につながったこともあり、対話することがいかに大切かをより実感しました。



発表者より

## 保育の「質」は「対話」で決まる

保育の質を高めるためには、心を開いた保育の語り合いが必要

「省察」し、多様な他者とともに子どもを語り合うこと

○専門性の高い保育者とは、多様な他者に対してその身体が開かれており、共感的にかかわり合い、お互いの見方や行為を収奪し合いながら自分の見方や行為を「省察」することができる存在

○保育者の成長には、多様な他者に対してその身体が開かれ、共感的な場を築き合っていくことが欠かせない

## 「対話」がキーワード 保育を語り合うこと

三谷大紀「第4章 保育の場における保育者の育ち」 佐伯胖編『共感—育ち合う保育の中で—』  
ミネルヴァ書房、2007年、pp.152-153

## 研修生の報告書より

・保育ウェブは、自園でも昨年度から活用しています。立案して終わりではなく、現在進行形で関係者全員が経過の把握や、振り返りがしやすく、次のねらい設定へとつながりやすいと実感しているので、引き続き、活用していきます。

・『味わう』という言葉、とても奥が深いと思います。自分自身、子ども、双方の関わりを味わえるよう、職員と確認していきます。

・生き生きと保育を語れる保育者が多く、子どもやその環境をよく見ようと取り組まれていることがよくわかりました。保育者が自身の保育を語れる力が培われていることが最も必要な力なのではないかと思いました。

・対話の重要性がわかっていながらも、人手不足でなかなか厳しい状況であることを言い訳にしていたけれど少しの時間でも担任同士で話をしていかなければいけないと感じた。